



垣方言の型に統合されたと言う。

文法について 動詞の活用形をとり上げて分析されている。石垣方言や波照間方言の終止形に二つの語形が認められるという。それぞれがどういう使い分けがあるかについては説明がない。なぜ、与那国方言には二つの語形は認められず、一つの語形が対応するのか。知りたいところである。

本書の本論を構成している語彙篇は、「南琉球方言基礎語彙の見かた」「語彙の部分体系」「語彙資料の記述と比較」から成る。

語彙の部分体系には、I「作る」と「繕う」と「こしらえる」、II 親族に関する語彙、III 生物に関する語彙、IV 植物、V 波照間方言の生活語彙の論文を含む。

I において、南琉球方言では、いろいろなものを作るという作業過程について、本土方言とは異なる見地から、作業過程に分節を加え、ことばをあてている、と言う。具体的には、①完成に至るまでの作業全体、②ある段階に至るまでの下ごしらえの作業。下ごしらえの作業がその作業の対象と内容によって別の語形が用いられる。下ごしらえの作業に該当する語の一部に、共通語の「繕う」に音声的に対応する語形が用いられ、本土方言ツクル、コシラエルに当る意味で用いられると言う。

II において、曾祖父父母の世代、祖父父母の世代、父母の世代、自分の世代、子の世代、孫の世代、曾孫の世代、玄孫の世代、そして親戚の親族語彙について記述する。

III において、指小辞、動物の身体部分名称、動物を飼養する意味の動詞について記述する。

IV において、植物の区分、木の部位に関する語彙、根に関する語彙、枝に関する語彙、葉に関する語彙、実に関する語彙について記述する。

V において、漁法に関する語彙、魚名、鯉節作りに関する語彙、微細地名に関する語彙について記述する。

「語彙資料の記述と比較」は、六二五ページに及び、約二、五〇〇語の調査項目を五十音順に並べる。表記は音韻カタカナ表記、音声記号を併記。意味・用法の記述は、語構成や語源を漢字仮名交りで示す。品詞名、動詞と形容詞は活用形を示す。意味説明、例文を示す。必要に応じて図表であらわす。関連する語や種類または共起関係にある語などを示す。

見出し語・例文において、アクセント記号は総べて省略されている。

語彙の研究に際して、方言の語形や意義を記述するだけにとどまらず、語構成や発想にまで注目されたことは特筆される。

例えば、「買う」と「売る」の体系について次のように分析しておられる。

地域		項目
		買う
共通語	カウ	売る
波照間方言	カウ	カースン(買わせる)

右表でわかる通り、波照間方言では、「買う」の意義に対応する方言語形は「カウ」であるが、「売る」には「カースン」という語形

が対応し、「買わせる」の義である。「売る」に対応する語形は存在しない。その点他の八重山方言、与那国や石垣とも、異なった体系をなしている。この発想は、単に「売買」に限らず、派生語にまで及ぶ。「葉屋」には「フチリカシミヒー」が対応する。この語形の語構成はフチリ(葉)・カシミ(買わしむる)・ヒー(家)である。

平山博士の研究は、その成果の大きさは言うまでもないことであるが、その組織力において空前のものであり、そのスケールにおいて未だ誰もなしえなかつたものであり、その影響力において最も偉大な足跡を残された。

私たちは、ここに日本の方言研究の一つの頂点をきわめた典型を見ることができるであろう。

このような完璧な研究書の書評というものはとても私、ごとき浅学非才の者の十分になしうるものではないが、本書の学恩をこうむる者の一人として義務をはたそうと努めることにする。

以下、本書から、何を学び、何を考えることができるかについて、いささか卑見を述べ、読者各位の御高評をおおぎたいと思う。

さて、書評は、どこまで及ぶべきであろうか。研究目的、調査地点の選定、調査項目の選定、研究調査チームの編成と調査研究の分担、インフォーマントの選定、調査方法・場所・日程等、調査地点に関する資料、調査結果の整理、調査者間の調査結果の異同・異見の調整、得られた情報の分析、記述方法の統一、見出し項目の立て方、複合語・成句の扱い、用例例文、意義記述、問題の整理と解決方法、特筆すべき事項など、多岐にわたることが了解される。

本書は、「全国方言基礎語彙の総合的研究」のテーマの下に、南琉球諸島のうち、石垣市・波照間島・与那国島の方言基礎語彙を意味

だけでなく音韻・文法等の形式をも含めて総合的に記述し、比較した(はじめに)より引用)ものである。方言基礎語彙とは、本書の述べるところによれば、各地域社会の中に育ち、その地域社会の日常生活に密着している重要な語の集団である。本書の調査項目は、約二、五〇〇であるが、臨地調査を実施することと補完整備をしたと言われる。全国調査の困難点はまず、調査項目の内容の問題である。北海道・東北地方の雪国から悪熱帯海洋民族の琉球まで、気候風土はもとより生活基盤を異にした日本全国に最適の基礎語彙を選定することの苦勞がしのばれる。

調査地点は、平山博士が、二五年前に約一〇〇余日の琉球全般の方言調査をした中で、通時的にも共時的にも、特色の目立った与那国町(日本最西南端)と竹富町波照間島(日本最南端)および八重山諸島の唯一の中心城市石垣市の三地点を選定されたと述べられる。

調査研究チームは、平山博士を代表に、内間直仁、大島一郎、大野眞男、加治工真市、久野眞、久野マリ子、杉村孝夫(五十音順)の八氏で、すべて琉球方言調査研究の経験者を選ばれたと言う。

臨地調査は、八五年五、六月に試行調査を、同年七、八月と八六年七、八月に本調査を実施、各分野の調査および記述に当っては、一応責任分担の形をとったが、調査資料全体について調査以前の打ち合せのほか、現地での調査期間中は、会場または合宿の場で、検討を重ね、とくに合宿の場では、夕食後毎夜、その日の各自の調査結果について質疑応答を行なったと述べられる。調査場所は、調査日誌がないので詳しいことはわからないが、写真資料(グラフィック)などから判断すると、公民館など公共の施設を利用されたようである。

インフォーマントは、同一方言内で、複数の現地はえぬきの老年

層(六〇歳〜九〇歳)を選定されたと言う。複数のインフォーマントについて調査される場合、必ず個人的に異なった情報が得られるはずであるが、その複数の情報はどうか処理され、どう記述されるのかということについては、特に述べておられないので不明である。ひとりのインフォーマントから、同一質問に対して複数の回答が得られた場合にどうか処理するか。複数のインフォーマントから、同一質問に対して複数の回答が得られた場合にどうか処理されたか。詳しい説明があつたならば、後学の者には、おおいに参考になるのである。平山博士ご自身は、おそらく作業原則のようなものをお持ちだと思われるが、本書には明示されていない。

インフォーマントの選定に関連して付言するならば、石垣市の四箇<sup>し</sup>方言には旧土族語と平民語の区別が存在するので、社会方言についての配慮も必要になってくるのではないか。

与那国島や波照間島が、半農半漁の単純な社会構造を基盤としてゐるのに対して、石垣市は、近世以降土族と平民の階級分化が進み、明治以降は商工業都市として発達し、今日に及んでいる。職業の分化や階層の分化もそれだけ進行している。石垣方言のインフォーマントの選定には、平民語の提供者なのか、旧土族語の提供者なのか、それとも明治以降外部から移住してきた新参者なのか、区別されるべきであろう。石垣方言に関しては、地域方言だけでなく、社会方言にも留意しなければならない。

例えば、本書四一六頁に「父」の項目があり、石垣方言では、「シュー」「アヤ」「ビゲー」の三語が登録されているが、その三語は、「シュー」①名称(用例省略―筆者)②呼称(用例省略―筆者)「アヤ」シューに同じ。「ビゲー」呼称としては用いられない。と、記述されて

いて、三語の相違点が不明である。社会言語学的考察を加えれば、「シュー」は第一に旧土族語であり、親族名称としても呼称としても用いられるが、絶対呼称である。第二に、親族語としての意義の他に、「主人」「役人」「旦那」など、他人を敬う時にも用いられるのである。

「アヤ」は平民語の親族名称であり呼称である。

親族語彙は、一般に琉球方言においては、階級意識とも関連して、実際の言語生活に際して、微妙な人間関係から、常に公式通りに用いられているとは限らない。調査に立ちあつてくださったインフォーマント自身は、誰に対してどの語形を用いているか。それによつて、インフォーマント自身の階級への帰属意識があきらかとなり、同時に社会的ステータスも反映されるからである。また、他人はインフォーマントを実際に「シュー」と呼んでくれるか、「アヤ」と呼ばれるのか、知りたいところである。決して「アヤ」は「シュー」に「同じ」(本書四一六ページ)ではないのである。

さらに、第三の語形として登録されている「ビゲー」は、宮良当壮博士によれば、「ビギオヤハ男親V」の転で、ブネー(女親)の対語であるという。従つて、ビゲーは呼称としては用いられないのである。

もちろん、与那国方言や波照間方言には、このような使い分けは認められない。いずれも「イヤ」一語だけである。

「総説」の「II親族に関する語彙」の解説を読んでも社会言語学的考察はみられなかった。

親族語彙といえは、よくegoを中心左右対称にパラレルな体系図をみかけることがあるが、石垣方言に関する限り、それほど単純

なものではない。親族内における地位や役割分担のちがいによって、語彙体系もつねにすつきりしたかたちを反映するわけではないのである。父と子の関係、母と子の関係も同一ではありえない。そのこととは語彙の上にも鮮明にあらわれている。

石垣方言では、母を幼児語では「ジッチ」と言うが（本書には採録されていない）、父の幼児語は存在しない。つまり対語は成立しないのである。それは単に父子関係と母子関係の相違にとどまらず、石垣市の生活様式の中に乳母という役割をはたす存在物が介在したことにも一因がある。ジッチは元来「乳」の義であり、転じて、乳母、さらに母一般を意味するようになったと推察される。

フィールドワーク、それはまさに無から有を生み出す作業過程であり、方言研究の基礎である。これなくしては、方言研究は成立しえないからである。いま学者がフィールドワークを怠ったならば、今後の方言研究はきわめていびつなものになってしまいか、変質させられていくにちがいない。

平山博士は、永く東京都立大学で教鞭をとられ、国学院大学日本文化研究所に移られて後も、多くの優秀な弟子たちが、博士と行を共にされ、全国の方言研究のためにフィールドワークに精力的に取り組まれてこられた。

研究に方法がある以上、方言研究は他人が調査した資料だけに基づいて論文を作成するには限界がある。そればかりではない。フィールドワークはいつでもどこでも実施できるといふ性質のものではない。

時が経てば人が変り、ことばも変る。時には二度と同じ結果が得られないということもある。

同じ時に実施した調査でも、インフォーマントが異なれば、その得られた結果に異同が生じてくることもある。極端な場合には、同じインフォーマントを複数の調査者が、調査して、異なった情報を得ることもある。同一インフォーマントから同一調査者が同じ項目について調査を実施しても、状況によって、または時の経過と共に、異なった回答がよせられることもある。研究の成果は、フィールドワークの量と質に左右されることになるわけである。

「こんぶ」（昆布）は、石垣方言で「クラブ」のほかに「アーサ」の語形が採録されている。しかし、「アーサ」は「青のり」（海苔）の義であるから、「のり」（海苔）の項目に移すべきである。

「アーサ」（あおさ）三〇一頁の記述と「アーサ」（あおさ）五一〇頁の記述内容が異なっている。統一すべきであろう。

「いも」にはいろいろ種類がある。サツマイモ、サトイモ、ヤマイモ、ジャガイモのほか、日本では琉球諸島だけで栽培されているタイモ（田芋）、八重山諸島だけで栽培されている山芋の一種のツルイモ（形はジャガイモに似る）やクワズイモの方言も採録され、石垣市では芋の総称もみられる。採集された方言を表にまとめると次ページ(A)表の通りである。(B)表は、筆者が調べた結果である。(A)と(B)のあいだに、多少異同がみられる。

さつま芋は、一六〇五年野国総管によって中国から琉球に伝えられる。八重山地方では「赤芋」の系統が用いられている。方言語形は石垣市「アッコン」、波照間「アガン」。与那国の「ウンティ」は「小芋」の義である。ティは指小辞。里芋は、石垣「ムージウ」、波照間は採集されていないが、筆者の調査では「ムジウ」または「ムージウ」であり、与那国「ムダ」である。筆者の調査では、「ムダ」の



ジャガイモは近年になってから栽培されるようになった新品種で、いわゆる方言形は存在しない。

助詞に関する記述は不十分であり、従来の研究が必ずしも活かされてないように思う。

例えば、琉球方言において、助詞「に」の用法は、体言に付属するものと用言に付属するものとは、語形が異なっていることがあることは、既に筆者などがあらかじめしてきたところであるが、本書の記述では、そのことがあいまいである。

四八七頁の「に」の記述には、石垣「カイ」(目的)「ガドゥ」(場所)の記述があり、いずれも体言に付属する用例であり、用言に付属する用法が示されていない。波照間は用言に付属する「ンガ」(目的)と体言に付属する「ナガ」(①場所②帰着点)の用法が例示されている。与那国は、用言に付属する「ンデイ」(目的)の用法が例示されている。体言に付属する用法は記述がない。

このような不統一は、利用する読者には、不便であり、誤解を招きやすい。

以上、本書の内容を紹介しながら、卑見を述べた。一、〇〇〇ページに近い大著を、わずか二十枚で書評するのは、意を尽さないことが多い。また、評者の浅学による読み違えなどがありはせぬかとおそれる。もし、不適切な論評があれば、著者の御寛恕を乞い願うばかりである。

本書をひもといて、ページをめくり、ながめているだけで、いろいろな想念がよみがえってくる。宮良当社の八重山語彙と引き比べたり、自から調査したノートをひろげてみると、今まで見えなかつ

たものが、ひとつひとつときあかされていくのをおぼえる。

私は、これから本書をかたわらに、多くのことを学んでいきたいと思っている。

ドイツの詩人リルケはロダンを讀んで次のように述べたと言う。

Rodinこの五つの文字は、芸術の天空に光り輝く不滅の星座をなす五つの星である。

わが平山博士は、日本の言語学界にひとときわ高くそびえ立つ巨峰である。その弟子たちや後学に与えた影響ははかり知れないほど大きく、かつ深い。

平山博士がますますご壮健で、日本語学の振興のために、ご尽力賜りますよう祈念してやまない。

(昭和六十三年二月二十八日発行 桜楓社刊 B5判 九八二頁 七四〇〇円)

——琉球大学教授——

(平成四年一月十六日 受理)